

[B年] 受難節第3主日(2023年3月12日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 63章7～14節**

- 7 わたしは心に留める、主の慈しみと主の栄誉を
主がわたしたちに賜ったすべてのことを
主がイスラエルの家に賜った多くの恵み
憐れみと豊かな慈しみを。
- 8 主は言われた
彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。
そして主は彼らの救い主とられた。
- 9 彼らの苦難を常に御自分の苦難とし
御前に仕える御使いによって彼らを救い
愛と憐れみをもって彼らを贖い
昔から常に
彼らを負い、彼らを担ってくださった。
- 10 しかし、彼らは背き、主の聖なる霊を苦しめた。
主はひるがえって敵となり、戦いを挑まれた。
- 11 そのとき、主の民は思い起こした
昔の日々を、モーセを。
どこにおられるのか
その群れを飼う者を海から導き出された方は。
どこにおられるのか
聖なる霊を彼のうちにおかれた方は。
- 12 主は輝く御腕をモーセの右に伴わせ
民の前で海を二つに分け
とこしえの名声を得られた。
- 13 主は彼らを導いて淵の中を通らせられたが
彼らは荒野を行く馬のように
つまずくこともなかった。
- 14 谷間に下りて行く家畜のように
主の霊は彼らを憩わせられた。
このようにあなたは御自分の民を導き
輝く名声を得られた。

【使徒書日課】 テモテへの手紙二 2章8～13節

- 8 イエス・キリストのことを思い起こしなさい。
わたしの宣傳伝える福音によれば、この方は、ダ
ビデの子孫で、死者の中から復活されたのです。
- 9 この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに
犯罪人のように鎖につながれています。しかし、
神の言葉はつながれていません。¹⁰だから、わたし
は、選ばれた人々のために、あらゆることを耐え

忍んでいます。彼らもキリスト・イエスによる救
いを永遠の栄光と共に得るためです。¹¹次の言葉
は真実です。

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、
キリストと共に生きようになる。

¹² 耐え忍ぶなら、

キリストと共に支配するようになる。

キリストを否むなら、

キリストもわたしたちを否まれる。

¹³ わたしたちが誠実でなくても、

キリストは常に真実であられる。

キリストは御自身を否むことができないからで
ある。」

【福音書日課】 ルカによる福音書 9章18～27節

¹⁸ イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子
たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わ
たしのことを何者だと言っているか」とお尋ねに
なった。¹⁹弟子たちは答えた。『『洗礼者ヨハネだ』
と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人
も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言
う人もいます。』²⁰イエスが言われた。「それでは、
あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペト
ロが答えた。「神からのメシアです。」

²¹ イエスは弟子たちを戒め、このことをだれに
も話さないように命じて、²²次のように言われた。
「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司
長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目
に復活することになっている。」²³それから、イエ
スは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、
自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わ
たしに従いなさい。²⁴自分の命を救いたいと思う
者は、それを失うが、わたしのために命を失う者
は、それを救うのである。²⁵人は、たとえ全世界を
手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったり
しては、何の得があるのか。²⁶わたしとわたしの言
葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天
使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥
じる。²⁷確かに言っておく。ここに一緒にいる人々
の中には、神の国を見るまでは決して死なない者
がいる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 63章7～14節

- ⁷ 私は、主の慈しみと主の誉れを語ろう
主が私たちに報いてくださった
すべてのことのゆえに
主がその憐れみと豊かな慈しみに従って
イスラエルの家に報いてくださった
多くの恵みを告げよう。
- ⁸ 主は言われた
彼らは確かに私の民、偽りのない子らであると。
そして主は彼らの救い主となられた。
- ⁹ 彼らが苦しむときはいつでも、主も苦しまれた。
御前に仕える御使いによって彼らを救い
その愛と憐れみによって彼らを救い
昔からずっと彼らを負い、担ってくださった。
- ¹⁰ しかし、彼らは逆らい、
主の聖なる霊を悲しませた。
それで、主は彼らの敵となり、彼らと戦われた。
- ¹¹ その時、主の民は思い出した
昔の日々を、主の僕モーセを。
どこにおられるのか
羊の群れを飼う者と共に
彼らを海から連れ出した方は。
どこにおられるのか
彼の上に聖なる霊を置いた方は。
- ¹² 誉れある御腕をモーセの右に進ませ
彼らの前で海を分け
とこしえの名声を得られた方は。
- ¹³ 彼らに深淵の中を行かせた方は。
彼らは、荒れ野を行く馬のようにつまずくことがなかった。
- ¹⁴ 谷間に下りて行く家畜のように
主の霊は彼らを憩わせられた。
こうして、あなたはご自分の民を導き
誉れある名声を得られた。

テモテへの手紙二 2章8～13節

- ⁸ イエス・キリストのことを思い起こしなさい。
私の福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、
死者の中から復活されました。⁹この福音のために
私は苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につ

ながれています。しかし、神の言葉はつながれて
いません。¹⁰だから、私は、選ばれた人々のために、
あらゆることを耐え忍んでいます。彼らもキリス
ト・イエスにある救いを永遠の栄光と共に得るた
めです。¹¹次の言葉は真実です。

「私たちは、この方と共に死んだのなら
この方と共に生きるようになる。

¹² 耐え忍ぶなら

この方と共に支配するようになる。

私たちが否むなら

この方も私たちを否まれる。

¹³ 私たちが真実でなくても、

この方は常に真実であられる。

この方にはご自身を

否むことはできないからである。」

ルカによる福音書 9章18～27節

¹⁸ イエスが独りで祈っておられたとき、弟子た
ちが御もとに集まって来た。そこでイエスは、「群
衆は、私のことを何者だと言っているか」とお尋
ねになった。¹⁹弟子たちは答えた。「洗礼者ヨハネ
だと言う人、エリヤだと言う人、ほかに、昔の預
言者の一人が生き返ったと言う人もいます。」²⁰イ
エスは言われた。「それでは、あなたがたは私を
何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神のメ
シアです。」

²¹ イエスは弟子たちを戒め、このことを誰にも
話さないように命じ、²²そして、言われた。「人
の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律
法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活
することになっている。」²³それから、イエスは皆
に言われた。「私に付いて来たい者は、自分を捨
て、日々、自分の十字架を負って、私に従いなさい。
²⁴自分の命を救おうと思う者はそれを失い、私
のために命を失う者はそれを救うのである。²⁵人
が全世界を手に入れても、自分自身を失い、損な
うなら、何の得があろうか。²⁶私と私の言葉を恥じ
る者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちと
の栄光に輝いて来るときに、その者を恥じるであ
ろう。²⁷確かに言うておく。ここに立っている人々
の中には、神の国を見るまでは、決して死なない
者がいる。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・3月12日「受難節第3主日」の日課主題は「受難の予告」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、民が主を忘れ困難に陥る中でかつての主の御業を思い起こして主を呼び求める姿を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙二」から、イエス・キリストの福音を思い起こすよう促す箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、ペトロの信仰告白と主イエスの受難予告を伝える箇所。

旧約日課(イザヤ 63 章より)

・「イザヤ書」は、ヘブライ語(旧約)正典「後の預言者」の第一に置かれた預言書。バビロン捕囚期後にペルシア支配下でなされたユダヤ帰還・エルサレム神殿再建から始まる「ユダヤ教共同体」形成の土台となる正典「律法と預言者」編纂を担った集団において、正典の要諦に位置づけられたと考えられる。1~39章は、前8世紀に南王国で四代の王に仕えた宮廷預言者イザヤの預言と活動を伝える原「イザヤの預言の書」に基づいて編集されていると考えられ、他方40章以下は、前6世紀のバビロン捕囚末期からユダヤ帰還事業が進められた時期に、歴史的預言者イザヤの伝統を受け継ぐ者であることを自認する祭司・預言者集団によって付加された預言集と考えられる。前者(1~39章)は「第一イザヤ」、後者(40章以下)は「第二イザヤ」と呼ばれることがある。ただし、一部の福音派聖書学者の中には、全章を歴史的な預言者イザヤに帰するものとして解釈する立場の者もある。

・日課箇所は、「第二イザヤ」に含まれ、バビロン捕囚から解放されユダヤ帰還事業が進められる中で告げられた預言として解釈される。

・8~14節は、正典「律法と預言者」が拠って立つ歴史観に基づいた「イスラエル正史」の要約として展開されている。「申命記」に特徴的に表れていると理解されてきた歴史観(申命記的歴史観)でもある。これによれば、正典「律法」の第二巻「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」で語られる民のエジプト脱出から荒野の四十年の旅までの出来事を基本となる物語として踏まえて、カナン定住後から王国滅亡までのユダ・イスラエルに起こった出来事が評価され、語られる。その歴史語りを逆に遡上するように、イスラエルの民は、現在自分たちの身に起こっている困難を自分たちが主から離れ主に背いた結果として理解し、かつてモーセの導きのもとで民の先祖が主の恵みにより生かされてきたことを想起するべきであると勧める預言として告げられているのが、日課箇所の語りである。

・10節および11節「聖なる霊(ルーアハ・コーデシヨ)」は、「旧約」中では他に「詩編」51:13でしか見られない表現。ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳)では「ブネウマ・ハギオン」で、新約の「聖霊」と同じ表現。

使徒書日課(Ⅱテモテ2章より)

・「テモテへの手紙二」は、「パウロ書簡集」に収められた書簡文書で、「手紙一」および「テスへの手紙」と共に「牧会書簡」の呼称で呼ばれてきた。パウロが自分の宣教活動の協力者として伴って来た若き宣教者テモテに宛てて、教会指導者(牧会者)としての心得を述べる構成となっている。これら「牧会書簡」の三文書を、現代の歴史批評主義の立場を取る聖書学者は、パウロ自身の著したのではなく、パウロの後継者らが組織的教会形成を進めるようになった時代に編集したものともみなしている。しかし、これらの文書は「書簡」としての形式や内実を伴っており、安易にパウロから切り離して扱えるものではない。また、初期教会では、1世紀末には教会教父らによって「牧会書簡」に見られる表現や警句が用いられた教えが語られており、何者かが敢えて「パウロの名」を偽って書簡文書を作成する意義がどれほどあったか疑義がある。古代教会以来、これらの書簡文書が「パウロ書簡集」に含まれ、パウロ自身の手による書簡として読まれてきたことも踏まえれば、敢えてパウロ自身の著作ではないことを前提に解釈する意義はほとんどない。

・本書簡「手紙二」は、パウロが最晩年のローマ滞在中、エフェソの教会に残って活動していた宣教協力者のテモテに宛てて記した体裁になっている。1章および4章には、執筆時のパウロ周辺の人々の状況が事細かに記されており、パウロから離れた者や病気の者などが少なくない事情が示されている一方、マルコやルカなど継続的に助け手となってくれる存在がいたこと(4:11)も語られている。マルコは、「バルナバのいとこ」(コロ4:10)で、「使徒言行録」によれば、パウロも参画したバルナバ宣教団に当初加わりながら、すぐに離脱してしまったにもかかわらず、バルナバが再び自分の宣教活動に参加させようとした人物。この件で、パウロは、バルナバと意見を違え(使徒15:37~39)、新しい宣教団を組織して独自の活動を始めたこととされている(同15:40)。このマルコの一件で新たに組織されたパウロの宣教団に協力者として招かれたのがテモテで(使徒16:1~3)、彼は、ギリシア人の父とユダヤ人の母のもとに生まれ、幼少時から初期教会に祖母および母と共に通っていたとされている(Ⅱテモ1:5)。

・11節および13節「真実」と訳されている語は、原語(ギリシア語)「ピストス」で、「ピスティス」の形容詞形。13節「誠実でなくて」と訳されている語は、原語「アピストウーメン」で、「ピスティス」に否定辞「ア」の付いた派生語。「ピスティス」は、通例「信仰」と訳されるが、字義は「信頼/誠実/忠実」の意。11節直訳「この言葉(ロゴス)は信頼に足る」、13節直訳「わたしたちが信頼に値しなくても、キリストは常に信頼に足る」。

・11~13節は、初期教会で定型化された「キリスト賛歌」の一つではないかと考えられている。ただし、原文ではここに「キリスト(クリストス)」の文字はなく、指示代名詞もほとんど省略されている。

福音書日課(ルカ9章より)

・日課箇所は、「ペトロの信仰告白」と「主イエスの受難予告」を伝える箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えており、この二つの逸話から始まって、「山上の変貌」、「汚れた霊に取りつかれた子の癒し」、「再度の受難予告」、「弟子たちの序列争い」の逸話までがひとまとまりの伝承群を形成していると考えられる。

・「ペトロの信仰告白」の逸話を、「ルカ」は「マルコ」同様、簡潔なやり取りとして伝える。ペトロの告白は、マタイが「あなたはキリスト、生ける神の子」、マルコが「あなたはキリスト」であるのに対して、ルカは「神のキリスト」(いずれも私訳。新共同訳は、このギリシア語「キリストス」を「メシア」と訳している)。ルカは同じ表現を 23:35 でも用いている。「あなたは(スー・エイ)」が略されている理由は不明だが、この表現を「ルカ福音書」は、目上の者に対して敬意をもって語る場合には用いていない。

・19 節「洗礼者ヨハネ」は、主イエスに洗礼を受けた洗礼運動指導者で、当時のユダヤ人社会で大衆的な人気を博していた宗教家の一人。旧約「マラキ書」の預言する「主の日の前に再来するエリヤ」であると多くの者がみなし、主イエスもその見方に同意していたとされる(マタイ 17:10~13 など参照)。「エリヤ」は、旧約「列王記」の伝える、北王国オムリ王朝時代に在野で活動したとされる伝説的な預言者。「エリヤ」の後継とされる預言者「エリシャ」は、オムリ王朝打倒・イエフ王朝樹立の後ろ盾となったとされる(王下 9~10 章)。「エリヤ」は、「モーセ」と共に、正典「律法と預言者」に立つユダヤ教信仰の模範とみなされていた。後段の「山上の変貌」の逸話も参照。

・「主イエスの受難予告」の逸話で「マルコ」や「マタイ」が伝えているペトロと主イエスのやり取りを、「ルカ」は伝えていない。「ルカ」は、「マルコ」や「マタイ」が意図したであろう弟子たちの不信仰に対する警句的な箇所を省くことで、彼らの信仰に対する主イエスや神の圧倒的な主導性を強調しようとしているのかもしれない。

・23 節「自分を捨て(アルネオマイ)」は、「否む／打ち消す」の意で、「ペトロの否認」の場面でも用いられる用語(ルカ 8:45、12:9、22:57)。

・23 節「日々」は、ギリシア語「カテ・ヘー・メラン」の訳で、「毎日／日ごとに」も訳され、「ルカ文書」では多用されている(ルカ 11:3、16:19、19:47、22:53。使徒 2:46,47、3:2、16:5、17:11、19:9)。このような表現によって、「ルカ文書」では、信仰者の営みの日常性や日々の継続性が重んじられていると考えられる。「自分の十字架を背負って」という弟子のあり方も、主イエスのように最終的に殉教するようなことを想定しているのではなく、日々の信仰生活そのものが「十字架を背負った」営みとして整えられることを指向して考えられているのであろう。

来週の誕生日 (3月12日~18日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-120 番「主はわがかいぬし」(= II 41)は、詩編 23 編のスコットランド詩編歌で、ウィリアム・ウィッテンガムの原歌詞をピューリタンの讃美歌作家フランシス・ローズが補筆。曲は、19 世紀の詩編歌集で公にされ、1947 年の英女王結婚式で歌われ広まった。
- ・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにおうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。
- ・21-443 番「冠も天の座も」(I 124「みくにをも宝座をも」)は、19 世紀英国教会司祭の娘エミリ・エリオットが、父の牧する聖マルコ教会の聖歌隊のために作詞、1870 年発行の讃美歌集に採用され、英米で広く歌われるようになった。曲は、別の讃美歌集に採用されるに際して、この歌詞のためにマシューズが作曲。

21-120「主はわがかいぬし」

The Lord's my shepherd, I'll not want

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want; / He makes me down to lie / In pastures green; He leadeth me / The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again, / And me to walk doth make / Within the paths of righteousness, / E'en for His own name's sake.
3. Yea, though I walk in death's dark vale, / Yet will I fear no ill; / For Thou art with me, and Thy rod / And staff me comfort still.
4. My table Thou hast furnished / In presence of my foes; / My head Thou dost with oil anoint, / And my cup overflows.
5. Goodness and mercy all my life / Shall surely follow me, / And in God's house forevermore / My dwelling-place shall be.

21-443「冠も天の座も」

Thou didst leave Thy throne

1. Thou didst leave thy throne / And thy kingly crown / When thou camest to earth for me, / But in Bethlehem's home / Was there found no room / For thy holy nativity: / O come to my heart, Lord Jesus; / There is room in my heart for thee.
2. Heaven's arches rang / When the angels sang, / Proclaiming thy royal degree; / But of lowly birth / Didst thou come to earth, / And in great humility: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
3. The foxes found rest / And the birds their nest / In the shade of the forest tree; / But thy couch was the sod, / O thou Son of God, / In the deserts of Galilee: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
4. Thou camest, O Lord, / With the living word, / That should set thy people free; / But with mocking scorn, / And with crown of thorn, / They bore thee to Calvary: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
5. When the heavens shall ring, / And the angels sing / At thy coming to victory, / Let thy voice call me home, / Saying 'Yet there is room, / There is room at my side for thee; / And my heart shall rejoice, Lord Jesus, / When thou comest and callest for me.